

海が見える丘で

中沢 央

「古の人の常世の国といふは、蓋し疑はしくは此の地ならむか」

「常陸国風土記」で、こう称された地は、常陸国と呼ばれ、後に茨城となった。

そして、その茨城の中央あたりに、勝田と那珂湊という地域があった。この両地は一九九四年に合併し「ひたちなか」となった。

そこまで言うと、オーヴァルは教え子たちを見渡した。「これが、ひたちなかの興りだ。――近頃、魔物が近隣地域に出没していることは、聞いているだろう。先週、ひたちなかにも出たそうさだ」

別段騒ぎ立てる者もいなかったが、教え子たちの間に緊張が走ったことは感じられた。

「ひたちなかの要請を受け、水戸は、討伐部隊を派遣することにした。民間人の間にも有志を募るそうで、既に役所の前に、有志を募る張り紙が貼ってあるはずだ」

エルダーは役所を目指して歩いていった。ここは水戸。茨城の要所であり、ひたちなかと隣接する街だ。

ひたちなかに魔物が出たと、水戸交易所で耳にした。

魔物を討伐する有志を募る通知が水戸の役所にも出されている、ということも。

水戸の役所は、交易所から近い場所に位置しており、しばらく歩いているうちに、立派な建物が見えてきた。あれが水戸の役所だ。数年前に建て替えられたばかりの役所は、厳かなステンドグラスが施された豪華な建物だ。

エルダーは役所の正門をくぐると、役所からの通知が貼ってある掲示板を探した。

幸い、掲示板は正門の近くにあり、すぐに見つけることができた。ひたちなかの魔物討伐を呼びかける貼り紙は貼ってあるだろうか。

高齢者向け体操教室の案内、書物庫からの掲示……。「これだ」

ひたちなかの公印が押された張り紙には、見事、魔物を討伐してくれた者には、成果の大小にかかわらず、干し芋半年分を贈呈する、と書いてある。……干し芋って、何だ？

他にも、魔物討伐に訪れた者には、宿を無償で提供する、とも書いてある。――この魔物討伐で名を上げれば、ギルドの依頼も増えるかもしれないし、やって損はないはずだ。

とりあえず、ひたちなかの役所を目指せば良いだろう。しかし、もう日が沈みかけている。ひたちなかに向か

うのは明日にして、一先ず宿を探さなければ。

エルダーは役所を後にすると、宿を探し始めた。ここは役所の近くだし、すぐに見つけられるだろう。

役所から交易所方面へ足を進めていると、三十代くらいの男が声をかけてきた。

「お兄さん、うちの宿に泊まっていかないかい？」

「丁度良かった。宿を探してたんだ」

そう言うと、男は、愛想の良い笑みを浮かべた。

「そうですか、では是非うちに泊まって行って下さい」

「どんな宿か見てから決めるよ」

エルダーは、宿の男の後をついていくことにした。宿の男は狭い路地裏に向かっていく。エルダーも路地裏に足を踏み入れようとした。

「――待ちたまえ」

背後から、若い男の声が聞こえてきた。振り返ると、学者らしいローブに身を包んだ、端正な顔の男が立っていた。

「君が連れていかれそうになっているのは、売春用の宿だぞ」

「えっ?!」

「まあ、君が、そういうことをしたい、と言うのであれば、止めないがね」

そう言うと、学者風の男は、エルダーに近づいてきた。

男は二十代くらいだと思ったが、近くで見ると、雰囲気

のせいか三十前後にも見える。

「さあ、どうする？」

「えーと……」

そういうこと、に興味が無いわけではない。健康な若い男なら、当然だろう。

しかし、売春宿だとするならば、料金は高いだろうし、初めては好いた相手が良い。

エルダーは、一種の純真さを持つ少年だった。

「高いだろうし、遠慮しとくよ」

エルダーが断ると、宿の男は、あからさまに態度を変えた。

「チッ、ガキが来るんじゃねえよ」

宿の男の態度の豹変ぶりに、エルダーが咄嗟に何も言えなくなっていると、学者風の男は、エルダーの肩を叩いた。

「さあ、行こう」

エルダーは、学者風の男の後をついていった。

宿の男から離れると、エルダーは男に頭を下げた。

「さつきは教えてくれて、ありがとうございます」

若者は微笑した。

「どういたしまして。――君、成人はしているのか？」

「今十八です」

「そうか。成人しているのなら、声を掛けなくても良かったか？ まあ、ああいう店は、もう少し大人になってか

ら行きたまえ」

「お、おう……。ところで、あなたは、どうしてここに――」

言いかけて、エルダーは口を噤んだ。理由を聞くのは、野暮というものだ。

「待て、誤解しているようだが、私は女性を買いに来たわけではないぞ」

「あ、そうなんです」

「役所に用があつてきたのだ。ひたちなかの、魔物討伐の募集の張り紙を見にね」

エルダーは、思わず身を乗り出した。

「俺も、俺もです！」

「え」

「俺も、ひたちなかに魔物討伐に行こうと思つてたんです！」

エルダーは、若者の手を取った。

「俺と一緒に、ひたちなかに行きませんか？」

「君と一緒に、か……」

少し戸惑つたような声だった。

学者風の男は、悩んでいる様子だったが、すぐにエルダーの腰に差してある剣に視線を向けた。

「私は、魔法が使える。君の得物は……剣だね？」

エルダーは頷いた。

「攻撃の相性も良いし、なかなか良い組み合わせじゃな

いか？」

その言葉を聞き、エルダーは笑みを深くした。

「じゃあ！」

「私は、オーヴァルⅡクレイグ。水戸の高等学校で教師をしている」

オーヴァルも笑みを浮かべながら、一旦エルダーの手を解くと、握手をした。

「よろしく」

「俺は、エルダーⅡケルデイル。よろしくな、オーヴァル」

結局、昨夜は交易所近くの宿に泊まった。

朝餉が出る宿ではなかったため、お腹が減っている。

「少し歩いたら、どこかで休憩しようぜ」

「そうだな。……とりあえず、ひたちなかに着いたら休憩しようか」

「ここから、ひたちなかつて近いのか？」

「しばらくまっすぐ歩いていけると、水府橋という橋があるんだが、そこを渡ったらひたちなかは目前だ。……それほど遠くはないよ」

「魔物は、まだ水戸には出てないよな？」

「そうだね、ひたちなかの佐和の辺りで出たらしい」

佐和と聞いても、ひたちなか出身ではないエルダーには、ひたちなかのどの辺りなのか見当がつかない。

「佐和ってどこら辺？ ひたちなかの中心部？」

「確か、北の方にある街だよ。どうやら、魔物は南下してきているらしいな。もしかしたら、ひたちなかに入る前に、魔物と遭遇するかもしれない」

「オーヴァルは随分とひたちなかに詳しいな。地元とか？」

「いや、私は水戸出身だよ。ただ、魚を食べに、よく、ひたちなかは訪れていたから、少しは地名を知っているんだ」

その時、エルダーは、水戸は海に面接してないことを思い出した。

「エルダーは、ひたちなかは初めてか？」

「ああ」

オーヴァルは微笑んだ。

「ひたちなかは良いところだ。海の恵みと綺麗な景観が楽しめる。観光しに来たわけじゃないが、ひたちなかの魅力も分かると思うよ」

大きな橋が見えてきた。

「あれが水府橋だ」

オーヴァルが指差した先には、石造りの橋がある。ひたちなかは、もう目前だ。

橋を指して歩みを速めた直後、ラーメンの器に目と口がついたような、珍妙な生き物が現れた。ラーメンの上には、ナンらしきものも乗っている。

スタミナンと呼ばれる魔物だ。

「魔物だ！」

エルダーは剣を抜いた。

「まだひたちなかにじゃないのに！」

「氷よ、凍えろ！」

オーヴァルが詠唱した途端、魔物の体に氷柱ができた。氷柱はすぐに砕け散り、魔物にダメージを与えた。

すぐさまエルダーが剣で斬りつけ、とどめを刺した。スタミナンは息絶え、消滅した。

「弱かったな」

オーヴァルも頷いた。

「ああ。でも、この先には、もっと強い魔物もいるだろう。気を引き締めていこう」

エルダーは剣を鞘に収めた。

「水戸まで来ちゃったか……。ひたちなかはもう、魔物だらけかな……」

「――急ごう」

エルダーたちは足早に橋へ向かった。

橋の上でも、魔物は現れた。

三体のスタミナンだ。

「こいつ、ラーメンの上に何乗っけているんだ？ レバニラ？」

「そのようだな。レバニラを乗せたラーメンをスタミナ

ラーメンと言うんだ」

エルダーたちが話している間に、スタミナンが、熱々のレバニラを振りかけてきた。

「っと、あぶね」

エルダーは寸でのところで避けたが、オーヴアルの革靴に、レバニラのタレがかかってしまった。

汚れに気を取られている間にも、敵の攻撃は来る。

オーヴアルは、すぐに意識を魔物に戻すと、魔法を詠唱した。

「雷よ、轟け！」

一筋の稲妻が、魔物を貫いた。スタミナンは息絶えることなく、エルダーに襲い掛かったが、魔物よりも、エルダーの方が速かった。

エルダーは襲い掛かってきたスタミナンを斬りつけ、続けざまに二体目の魔物も切り裂いた。

これで、魔物はあと一体だ。

スタミナンは、エルダーが魔物に向き直るより早く、攻撃を仕掛けてきた。

熱々のタレとスープがからまったレバニラが、エルダーを襲った。

攻撃を避けることができず、エルダーの手にレバニラがかかった。

「あつっ！」

グローブの布地で覆われていない指先が、熱を受けた。

「炎よ、焼き——」

オーヴアルの詠唱が終わる前に、一本の矢がスタミナンに刺さった。

スタミナンは消滅した。

エルダーたちは、矢が飛んできた方に、視線を向けた。視線の先には、肩より長い髪をもつ、女性が立っていた。

女性は弓矢を手に行っている。この人が、スタミナンを倒してくれたのだろう。

オーヴアルは、弓を射ってくれた女性に頭を下げた。

「ありがとうございます。助かりました」

「うふふ、良いのよ」

女性の声を聞き、エルダーとオーヴアルは、思わず顔を見合わせた。——女性にしては、声が低い。

しかし、声が低い女性がいることも事実だ。変なことを口走り、目の前の女性を傷つけてしまうかもしれない。

(下手なことは言わない、良いね?)

(分かったぜ、相棒)

オーヴアルとエルダーは、瞬時のうちに、目配せだけで意思を疎通した。

エルダーたちの様子が面白かったのか、女性は笑みを深くした。

「私の性別について触れないなんて、アンタたち、良い人ね」

エルダーとオーヴァルは、女性——いや、女性か分からない——に視線を移した。

「アンタたちが考えてる通り、私は男よ。私は、ファルネウスⅡヴィクトー」

呆気にとられ、エルダーとオーヴァルは咄嗟に声をだせなかった。

「やつのことで声を絞り出したのは、オーヴァルだった。」

「——私は、オーヴァルⅡクレイグ。こちらは、エルダーⅡケルデイルだ」

オーヴァルは、ファルネウスと握手した。

「よろしく、ファルネウス」

「よろしくね」

握手をする、その動作さえも女性らしい。紅をさしているだけでなく、目元にも化粧を施していて、見た目は完全に女性だ。

エルダーも、ようやく声が出せた。

「ファルネウスは……何で女みたいな恰好をしているんだ？ 話し方も女っぽいし」

「私が女らしく振る舞う理由？」

「ファルネウスは顎に手を添えて、首をかしげた。

「私が、そう振る舞いたいからよ。それ以外の理由があるかしら？」

——それもそうだ。男が女のような言動をしたって、別に本人の自由であり、他人が口出しするものではない。エルダーは、ファルネウスの言動について、考えるのを止めた。

「ファルネウスも、魔物討伐に行くのか？」

「そうよ。故郷を守りたくてね」

それならば、自分たちの目的は同じだ。

エルダーはオーヴァルに耳打ちした。

「オーヴァル、ファルネウスに仲間になってももらえないか頼まね？」

「……そうだな、ひたちなかの地理に詳しい人がいた方が助かる」

エルダーはファルネウスに向き合った。

「俺たちも一緒に戦って良いか？ 仲間は多い方が良いだろ」

「アンタたちと……？」

ファルネウスは逡巡した後、微笑んだ。

「良いわよ。私、アンタたちとなら上手くやれる気がするわ」

エルダーは人懐っこい笑みを浮かべた。

「やったぜ！」

「さ、行きましょ。あと少し歩けば、ひたちなかに入るわ」

それ以降は、橋を渡りきる間に魔物は出なかった。橋を渡りきる頃には、水戸とひたちなかの境界を表す

境石が見えていた。

境石より先に足を踏み入れる。

「ここが、ひたちなか、か」

水戸とひたちなかの境目に、境石以外の目印になるような物は無く、境石が無ければ、ここがひたちなかだと、分からないだろう。

「何か、別にこれといったものは見当たらないな」

「ここは街外れの方だからね。東石川辺りなら、栄えているはずだよ」

「ちなみに、ここは枝川という街よ」

直後、再び魔物が現れた。

ナットウルフだ。

ナットウルフは、納豆をまとった狼だ。

「納豆かあ……。匂いつきそうだし、斬りたくねー」

「私の魔法で倒そう」

オーヴァルは魔導書を手に取った。

「雷鳴よ、轟け！」

オーヴァルのサンダーは、ナットウルフを貫いた。しかし、ダメージが足りなかったようで、ナットウルフは倒れることなく、納豆を飛ばしてきた。

ナットウルフの攻撃は、ファルネウスの服に当たった。

「納豆……」

ファルネウスは（精神的に）力尽き、地面に崩れ落ちた。

「ファルネウスーっ!!」

エルダーはファルネウスの肩を揺さぶった。

「起きろ、ファルネウス！ たかが納豆じゃねえか、怪

我はしてないんだろ！」

「炎よ、焼き尽くせ！」

仲間を倒された怒りからか、オーヴァルが放った炎は、通常よりも高い威力で敵を消し炭にした。

「ファルネウス！」

オーヴァルもファルネウスの傍に駆け寄った。

「起きろ、ファルネウス！ 納豆は臭いが、旨いだろう」

よく分からないフォローをするオーヴァル。おそらく、初めて仲間が倒されたことで、彼も動揺しているのだろう。

「うっ……」

エルダーたちの声が届いたのか、ファルネウスは（精神的）ショック死から蘇った。

「あら、私……」

「ファルネウス！」

しかし、ファルネウスの鼻腔を、納豆の独特な匂いが襲った。

「ファルネウスーっ!!」

エルダーの叫びも虚しく、ファルネウスは、再び力尽きた。

「何なのよ、あいつ……。狼なら噛みつき攻撃してきなさいよ、何で納豆飛ばしてくるのよ……」

ファルネウスは悪態をつきながら、村の井戸で自身の服を洗っていた。

近くに村があつて良かった。二人がかりとはいえ、長身のファルネウスを運ぶのは大変だった。

「ファルネウスの服が乾くまで、少し休憩していこうか」
オーヴァルの言葉に、エルダーは、あることを思い出した。

「あつ！　　そういえば、朝餉食べてねえじゃん」

オーヴァルは声を上げて笑った。

「そうだな。ここで朝餉を食べようか」

「それならいい物を持っているわよ」

そう言いながらファルネウスが取り出したのは、黄色くて平べったい物だった。

「何これ」

「干し芋よ。サツマイモを干したもののな」

これが、ひたちなかが報酬として配ろうとしているものか。これ半年分？　腐るんじゃないかねえの、あ、干してあるから長持ちするのか。

「干し芋は初めて？」

「ああ。――ありがたい」

エルダーは、ファルネウスから受け取った干し芋を、口に含んだ。

「――甘い！」

干し芋は柔らかいが、ねっとりとしていて噛みごたえがある。そして、とても甘い。

「うめえな」

正直な感想が漏れた。

「気に入ってもらえて良かったわ」

オーヴァルも干し芋を受け取っている。

「ところでさ」

エルダーは干し芋を食べながら、呟いた。

「何で野郎ばかりなんだよ、このパーティーは」

エルダーの言葉に、ファルネウスが目をつり上げた。

「失礼ね、私は女よ！」

「体は男じゃねえか！」

「心のことを言っているのよ！」

ファルネウスは自身の髪を指先に絡め始めた。その眼は、虫けらを見ているかのように、冷たい。

「それに、何アンタ。女の子と旅するのが目的で、ここまで来た訳？　それであわよくば、女の子とあんな事や、こんな事をする気なんじゃ……」

エルダーは頓狂な声をあげた。

「ちげえよ！ そんなつもりはねえよ」

「じゃあ、何で仲間に女の子がいけないことを嘆いているのよ」

「だってさ、冒険物語とか読んだとき、必ず女の子出てくるじゃん？ 野郎だけの冒険物語って無いじゃん？」

「確かに、男しか出てこない物語って思いつかないわね」
ファルネウスは肩をすくめた。

「でも、私が体も女だったら、一人で男集団に加わって旅をしたいとは思えないわね」

「何でだよ？」

エルダーの問いに、ファルネウスは、ため息混じりに答えた。

「だって、襲われたら嫌じゃない」

ファルネウスの答えを聞き、エルダーはハツとした。

「――なるほど！ ファルネウスは、すげえな。男じゃ考えつかないことも、考えられるもんな」

エルダーが純粋な気持ちでファルネウスを褒めたことが、彼の声から分かった。

エルダーの純粋な賞賛を聞くと、自然と笑みを浮かんだ。「ありがとう。アンタも、良い奴ね。純粋に人を褒めるのって、すごいことなのよ」

オーヴァルは、内心その言葉に頷いていた。

職場は、上司に媚びへつらう者が蔓延る場所だった。世辞など言えないオーヴァルは、教師長から可愛がられ

なかつた。

自分より歳下のはずなのに、ファルネウスの言葉は重みがあるように感じる。

押し寄せてきた暗い気持ちを押しやるように、オーヴァルは口を開いた。

「さて、ひたちなかに来たのは良いが、どこに向かおうか」

「役所で報酬のこととか、詳しく聞いた方が良いんじゃないか？」

「それが良いわね。ちなみに、役所は東石川にあるけど、ここから少し歩くわよ」

「じゃあ、もう少し休んでから行こうぜ」

ファルネウスが言った通り、半刻ほど歩いているが、役所にはたどり着いていない。

道中、同じく魔物討伐に来たと思われる、冒険者らしきパーティーを何組か見かけた。

一人につき、干し芋半分用意しなければならないのだ、ひたちなかの財政は大丈夫なのだろうか。住民の安全の他にも、財政的にもひたちなかは危機に見舞われているようだ。

多くの人が行き交う場所にたどり着いた。

交易所だ。

「勝田交易所だ」

「ひたちななかつて名前じゃないんだな」

「ひたちななは、勝田と那珂湊が合併してできた街なのよ」

水戸交易所と比べると、規模も小さく人は少ない。元々街の人口も全然違うのかもしれないが。

「役所はもう少しよ。…：どうする？ ポーションとか必要なもの買っていく？」

「俺は別に良いかな。水戸の交易所で色々買っておいまし」

「私は――」

オーヴアルが言いかけた時、誰かの悲鳴が聞こえてきた。

近くだ。

周りの人々も、何事かと、悲鳴が上がった方に目を向けている。

「何だあれ…：!!」

大きな角が生えた、獰猛な牛のような頭。ワニのような大きい尾に、成人男性の二倍はありそうな巨躯。

明らかに、今まで戦ってきた魔物とはレベルが違う。

ファルネウスは怯むことなく、弓を構えた。

ファルネウスが放った矢が、魔物の身体に突き刺さる。

しかし、ほとんどダメージが入らず、魔物は一瞬怯んだだけだった。

魔物は近くの酒場を、長い尻尾を振り回し襲った。

尾を一振りしただけで、レンガ造りの酒場に、大きな穴ができてしまった。

このままでは、街の被害が大きくなる。

エルダーも剣を抜くと、魔物に向かって走った。

「うおおおお!!」

エルダーは渾身の力を込めて、剣で魔物を斬りつけた。

しかし魔物の皮は厚く頑丈で、エルダーの剣では、ほとんど傷を負わせることが出来なかった。

「物理攻撃がほとんど効かねえ！ オーヴアル!!」

「ギガファイア!!」

オーヴアルは、MPを惜しむことなく高度魔法を唱えた。

勢いよく炎があがり、魔物を包み込む。

「グウア…：アアア!!」

魔物の苦しんでいる声を聞き、近くにいた冒険者らしき男が、剣を構えて魔物に突撃していった。

「今のうちに！」

しかし、魔物が苦しんでいたのは束の間で、魔物は突撃してきた男目がけて火を噴いた。

「ああいいいいっ!!」

まともに攻撃を食らった男は、悲鳴を上げながら炎に

身を包まれた。

人が熱さにもだえ苦しんでいるという、悲惨な光景に、武器を構え始めていた人々も言葉を失って立ち尽くした。

「誰か水持ってこい！」

「俺は神官様を呼んでくる！」

街の人々も冒険者たちを助けようと動き始めた。その姿を見、武器を手にする者たちにも、戦う意思が戻ってきた。

魔物はなおも、近くの建物に襲い掛かっている。

オーヴアル以外にも魔法を使える者が居合わせたように、炎や氷や風の魔法が魔物を襲う。

着実にダメージを与えられているはずだが、魔物はまだ倒れる様子が無い。

体力も桁違いのようだ。

エルダーも、通常よりダメージを与えられるスキルを使いながら、魔物に攻撃を続けた。

魔物が再び、火を噴いた。

一瞬、避けるのが遅かった。

炎が、エルダーの腕を包んだ。

腕が痛い。火傷を負うと、熱さの他に痛みが来ることを、エルダーは初めて知った。

「水を!!」

服についた火は、なおも消えない。

頭の中が真っ白になり、何も考えられない。エルダーは無我夢中で叫んだ。

「水は?」

「ここだよ、旅人さん！」

街の人が指示した水瓶に、一心不乱に向かった。

腕を水の中に突っ込むと、ようやく火が消えた。

安堵したため、エルダーは魔物の攻撃に気付かなかった。

魔物の攻撃が迫っていることに気づかず、咄嗟に動けないまま、エルダーは魔物の尾に弾き飛ばされ、建物に激突した。

「エルダー!!」

ファルネウスの叫びは、エルダーには届かなかった。

エルダーはピクリとも動かない。死んでいるのか、絶しているのか分からない。

ファルネウスがエルダーの元へ向かおうとした時、地面が黒く不気味な色に染まった。

それにファルネウスが気づいた直後、変色した地面から、魔法の柱が飛び出して来た。

魔法に身体を貫かれた激痛を感じた直後、ファルネウスの意識は闇へと落ちていった。

「何だよ、さっきの……」

周りの人々は再び恐怖に襲われた。先ほどの魔物の魔法は、広範囲に及び、何人かが倒れた。

オーヴァルは運良く、攻撃を免れていた。

「トライアイシクル！」

MPが残りわずかなことを、オーヴァルは感覚で分かった。MPを回復させる薬を、オーヴァルは持っていない。

このままでは、魔法を放てなくなる。

その時、魔物と目が合った。魔物はオーヴァルに狙いを定めたようで、真っ赤な瞳で睨み付けてきた。

その瞬間、オーヴァルの脳裏に、一つの思いが湧き上がってきた。

——このまま、自分が戦うことを諦めれば、死ぬ。毎日、死にたいと願いながら生きていたではないか。

やっと望みがかなうのだ。

オーヴァルは魔導書を持つ手を、力なく落とした。

もういい、死にたい。

死にたい？ ——本当に？

職場に行きたくないだけではないか？

死を覚悟したからだろうか、オーヴァルの中で自問自

答が繰り返された。

自分は、どうしたいんだ？ 自分の本当の望みは、死

ぬことなのか？

ふと、視線をずらすと、命の灯が消えそうな人々の顔

が目に映った。

その瞬間、渦巻いていた考えが、霧が晴れたように消え去った。

魔導書を持つ手に力が入る。

オーヴァルは魔物を睨み付けた。

死にかけている者の姿を見ると、諦める、という選択はできなかった。

自分が諦めなければ、この人たちは助かるかもしれない。

「デイベインスレイブ!!」

MPが残っていないオーヴァルは、自身の体力を消耗して、魔法を放った。辺り一帯が黒い雲に覆われたかと思うと、凄まじい閃光と共に、雷が魔物を貫いた。身体中を痛みが襲った。何かに貫かれたような、激しい痛みだ。

魔物が倒れたことを、瞼を持ち上げ、何とか確認することができた。

息が上手く吸えない。必死に息を吸おうとするが、激しい痛みのでいで、空気が身体に入っていない。

早く、助けを呼ばなければ……。

「魔導士さん、しっかり！」

周囲にいた人々がオーヴァルに駆け寄ってきた。

「ポーシオンだ！ さあ、飲んで！」

「神官さんも来てくれるよ！」

街の人たちが何か言っているが、その内容を理解する力も残っていない。

「仲間を……」

そこまで言っていると、オーヴアルの意識は、深い闇へと落ちていった。

オーヴアルが目を覚ましたのは、夜だった。

見慣れぬ天井を見つめながら、しばらく自身が置かれている状況が飲み込めなかった。

扉が開く音が聞こえ、オーヴアルは視線をずらした。ウェーブのかかった長い金色の髪の毛が部屋に入ってきていた。

「良かった！ 目を覚ましたんですね」

「君は……？」

娘は、軽く頭を下げた。

「私はザサ教の神官、フィニアニレコと申します」

「神官」と聞いても、ピンと来なかったが、自分も名乗らねば失礼だ。

起き上がろうとしたオーヴアルを、フィニアが慌てて止めた。

「駄目です、まだ万全な状態じゃないはずですよ」

その言葉を聞き、記憶が押し寄せてきた。

「他の人は無事ですか？ 私の仲間は？」

フィニアは、顔を曇らせた。

「助けられなかった方もいます」

フィニアの言葉を聞き、オーヴアルは息を呑んだ。

「仲間の方の特徴は？」

「……薄紫色の髪の毛……男性と、君ぐらいの歳の男性です」

心臓が痛いほど脈打っている。フィニアの言葉を聞くのが恐ろしい。

「私ぐらいの歳の方と、薄紫色の髪の毛の方ですね？ 二人ともが無事です。今は眠っています」

それを聞き、オーヴアルは安堵のあまり体中から力が抜けていくのを感じた。胸から鉛が取れたように、心が軽くなった。

「良かった……」

「あなたも、ヒールで治療はしましたが、休息が必要です。ここで、しばらく安静になさってください」

制止しようとするフィニアに構わず、オーヴアルは半身を起こした。

動き回る体力はないが、治療のおかげか痛みはない。

「本当に、ありがとうございます」

オーヴアルは深く頭を下げた。

二刻後、ファルネウスも目を覚ました。

陽が昇ってからオーヴアルは、ファルネウスが寝かき

れている部屋を訪れた。

「ファルネウスはオーヴァルの姿を認めると、ベッドから起き上がった。」

「オーヴァル！ 無事だったのね！」

「ファルネウスの声が弾んでいる。仲間が自分の無事を喜んでいることが、嬉しかった。」

「まだ安静にしまえ。身体は痛まないか？」

「大丈夫よ。神官様たちが治療してくれたおかげね」

「ファルネウスは不安げな表情を浮かべた。」

「あの魔物は倒されたの？」

「ああ。倒しておいたよ」

「ファルネウスは「あら」と呟くと、目を丸くした。」

「オーヴァルがとどめを刺したの？ すごいじゃない」

「周囲の人の助けや君たちの力があつたからだよ。他の人たちがいなければ――私は死んでいたさ」

「本当に、死を選んでいただろう。」

「ファルネウスは何か考えているかのように、黙っていた。」

「ファルネウスは、窓の外に視線を移した。」

「ここは、交易所の近くののだろうか、見慣れた酒場が見える。」

「ここは、自分の故郷だ。故郷を守るため、ファルネウスは、ひたちなかに帰ってきた。」

「ねえ、オーヴァル」

「ん？」

「オーヴァルは、何で魔物討伐に行こうって思ったの？」

「一瞬、言葉に詰まった。」

「せっかく魔法が使えるのだから、ひたちなかの人々の助けになりたい、と思ったからだよ」

「オーヴァルは、本当の理由を語らなかつた。」

「切長の瞳が、探るように見つめてくる。」

「……そう」

「何故そんな質問を。」

「故郷のため、人々を守るため、以外の理由は、崇高じゃないと言いたいのか」

「違うわよ。――初めて会った時からアンタ、暗い顔をしていたから」

「今度こそオーヴァルは言葉を失った。」

「私は、笑ったりしてたじゃないか」

「絞り出した声は、驚くほど低かつた。」

「ええ。笑顔の時もあつた。でも、アンタの笑顔って翳があるのよ。話していない時のアンタ、病人のように暗い顔しているのよ、気づいてる？」

「気が付かなかつた。」

「誰にも指摘されたことがなかつた。いや、職場で似たようなことを言われたような気がする。」

「クレイグ先生、大丈夫ですか？」

「先輩教師からそう尋ねられた時、何故そんなことを言

われたのか分からなかった。

あの教師にも、自分の姿は同じように映っていたのだろう。

何も言わないオーヴアルに構わず、ファルネウスは口を開いた。

「問い詰めるようなこと言ってごめんなさい。――これからもよろしくね、オーヴアル」

ファルネウスの声が優しくかった。

ファルネウスが何を言いたいのか、明言せずとも伝わり、オーヴアルは無言のまま頷いた。

エルダーが目を覚ましたのは、その日の夕方だった。

頭を強く打ち付けたにもかかわらず生きているとは、強運の持ち主だ。

「本当にありがとうございます!!」

動き回れるようになるや否や、エルダーは神官や司祭にお礼を言って回った。

数日も経つと、剣を振れるぐらいに回復した。

助けてくれたお礼としてお金を渡そうとしたが、ザサの司祭たちは頑として受け付けなかった。

とうとう一シリル（お金の単位）も渡せず、エルダーたちは教会を後にした。

役所に向かう途中にも、魔物は現れた。

干し芋のような姿をしたドライポテトだ。

エルダーの剣が、ドライポテトの一体を切り裂き、オーヴアルのサンダーがナットウルフを貫き、ファルネウスの放った矢が、ドライポテトの一体を貫いた。

しかし、残ったドライポテト一体が、体当たり攻撃を仕掛けてきた。

急いで、エルダーが剣でドライポテトを斬りつけようとした時、後方から何か飛んできた。

後方から飛んできた物が何か認識する前に、ドライポテトは消滅した。

どうやら、短剣が投げられたようだ。

「大丈夫か？」

低い男性の声だ。

エルダーたちは、声がした方に視線を向けた。

引き締まった腹が露になった、露出の多い服。

筋肉隆々の中年男性の踊り子がいた。

「何だよ!!」

エルダーは膝から崩れ落ちた。

「普通踊り子って言ったら、セクシーな美女がやるものじゃないの!!」

エルダーの様子に、踊り子の男性は困惑した表情を見せた。

「大丈夫か、彼は？」

「すいません、彼、思春期なんです」

オーヴアルはそう言うのと、エルダーをなだめた。

「そう落ちこまないで良いじゃないか、きっとこれから女性と巡り合う機会があるよ」

踊り子の男性は、四十前後に見える。

「俺はアルレシャⅡイグザレルト。ひたちなかの役人だ。

今は、臨時でできた、魔物討伐係に配属されているが、普段は民草安全課に所属している」

アルレシャはそう言うと、胸元についているブローチを指し示した。ブローチは青と緑と白の三色で構成されていて、ある一文字が刻印されている。おそらく、ひたちなかの役人であることを証明する物なのだろう。

「見たところ、あなたたちは魔物を討伐しに来てくれたんですよね？」

エルダーたちが頷くのを見ると、アルレシャは頭を下げた。

「ありがとうございます」

オーヴアルは、心なしか後ろめたいものを感じた。自分分は、純粋にひたちなかを救いたがために参加した訳ではない。

「いえ、そんな……」

エルダーは恐る恐る尋ねた。

「それより、アルレシャは何故、役人なのに踊り子の格

好を……？」

「昔、職場の送迎会の余興で踊りをかじつてな。それから、すっかり踊りにはまってしまい、今は皆の戦闘をサポートするために、踊り子をやっているんだ」

「そうなんです……」

オッサンに踊られても、元気が出るだろうか。

エルダーはそう思ったが、さすがに口に出せなかった。私には、ファルネウスⅡヴィクトー。オーヴアルⅡクレイグ、エルダーⅡケルデムよ。それで、魔物討伐に来たのはいいけど、何か手続きとか必要なのかしら？」

「ああ。報酬云々の関係もあるからな、役所で魔物討伐に来た者として、名簿に登録しなければならぬ。役所で受付しないと報酬は受け取れぬな」

「やっぱり役所の方に来て正解だったわね」

「ああ、それと」

アルレシャは苦虫を潰したように、顔をしかめた。

「魔物討伐に来た有志と偽り、悪事を働く輩がいてな。魔物の被害と同じくらい、そういった郎党による被害が報告されているんだ」

「非常事態にも、そういう輩はいるんだな」

エルダーの言葉に頷きながら、アルレシャは話を続ける。

「そこで、魔物討伐に来た者たちと偽り悪事を働かないよう、一つのパーティーごとに、俺たち役人が二人ずつ

つくことになった。このパーティーは正規の魔物討伐有志の集まりだ、って証明するためと、有志らが少しでも悪事を働こうものなら叩きのめすためだな」

「と、言うとは……。俺たちの場合、アルレシヤと、もう一人役所の人がつくわけか」

「別に俺以外の人がついていても良いんだが、まあ、これも何かの縁だろう。俺も丁度役所に戻ろうとしていたところだ。一緒に役所へ行こうか」

ひたちなかの役所は、新しくもなく古くもなさそうだった。

「典型的な役所って感じの作りだな」

「本庁舎は、な。敷地内に分庁舎がいくつかあるんだが、そっちの方が新しいから、いかにも役所、って感じの造りでもないぞ」

「部署がたくさんあるんだな」

エルダーが感心したように言うと、アルレシヤは苦笑した。

「これは、まだ一部だぞ。他に、湊支所もあるんだ」

本庁舎の隣の建物の前に、エルダーたちのような、冒険者らしき人々が並んでいるのが見えた。

「あそこが受付だ」

既に十組ほどのパーティーが並んでいる。受付自体にあまり時間はかからないのか、すぐに順番

が回ってきた。

受付に立っている役人の一人が、アルレシヤの姿を認めると、声をかけてきた。

「イグザレルト係長！ このパーティーについていくんですか？」

「成り行きでな」

「係長がつかなら安心だな」

アルレシヤに声をかけた男性は、近くに立っている女性に声をかけた。

「コルビュジェ、このパーティーについてくれるか？」
コルビュジェ、と呼ばれたのは、二十前後に見える若い女性だった。すっきりとした眉に、長い睫毛、大きな

青い瞳。可憐な雰囲気的女性だ。

「民草安全課のイグザレルト係長もいらっしゃるし、女性もいる。きつと、ついていっても安全だと思うよ」

「はい」

「え、私は――」

ファルネウスが何か言いかけていることに気づかず、女性は頭を下げた。

「干し芋推進課のユリアン。コルビュジェです。よろしくお願います」

何そのダセエ名前の課は。

アルレシヤ以外はそう思ったが、誰も口にはできなかった。

「干し芋推進課か。俺は、民草安全課のアルレシヤIIイグザレルト。こつちがオーヴァルIIクレイグ、ファルネウスIIヴィクトー、そしてケルデイルだ」

「ねえ、何で俺だけ苗字で紹介されてるの？」

エルダーはアルレシヤに詰め寄った。

「もしかして、俺の名前忘れた？ 会ったばかりだもんな、仕方ないよな。俺なんかより、オーヴァルたちの方が印象に残りやすいもんな」

「止めなさい、エルダー。面倒くさい彼女みたいになつてるわよ」

ユリアンは微笑んだ。「美人」と言うよりも「可愛い」と表現する方が、彼女には合っている。

「私、魔物と戦った経験無いので、足手まといかもしれないませんが、よろしくお願いします」

ユリアンは、エルダーのすぐ後ろを歩いている。

待ちに待った女の子だ。自分より年上な気もするが、歳の差は二、三歳ぐらいだろう。

アルレシヤのものより新しい、ひたちなかの役人であることを表すブローチが、誇らしげに飾られている。

ファルネウスが申し訳なきように言った。

「ユリアン。あなたに謝らなければならぬことがあるの」

「何ですか？」

「私、男なの」

ファルネウスの言葉を聞き、ユリアンの目が丸くなる。「えっ、男性だったんですか!？」

嫌がると思いきや、ユリアンは興奮気味にファルネウスに近寄ってきた。

「すごい！ 本物の女性みたいに綺麗ですね！ どこで買った化粧品使ってるんですか？」

ユリアンの思いがけない行動に、ファルネウスは呆気に取られていたが、彼女の言葉が嬉しかったのか、声を上げて笑い始めた。

「ありがとう。とっても嬉しいわ。私が使っている化粧品はね、海浜公園の近くにある商店街で買っているよ」

「ひたちなかのお店なんですわ！ 時間があつたら一緒に買いに行きませんか？」

「良いわね！」

楽し気に会話する女性たちを見て、アルレシヤが苦笑した。

「世の女性ってのは、お洒落が好きなんだな」

「雑貨屋にでも入って見たまえ、今までみたいに短時間で買物が終わらないだろうな」

ファルネウスは笑みを消し、申し訳なきように言った。「でも、ごめんなさい。女性一人にさせてしまつて」

「大丈夫ですよ、係長もいらつしやいますし。不安は、

あまり無いです」

「——そうね。もし、何かしようとする奴がいたら、私とあなたの上司が黙っちゃいないから、安心して」

その言葉を聞き、エルダーの背筋に冷汗が伝った。

(俺のこと指してないよな?)

「さて、受付も済んだところだが、次はどこへ向かおうか」

オーヴァルありがとう、話題を変えてくれて。

エルダーは心の中で、オーヴァルに礼を言った。

「そう言えば」

ユリアンが悩まし気な顔をした。

「那珂湊の魔物の数が増えてきていると、庁舎で耳にしました」

部下の報告を聞き、アルレシヤは心が決まった。

「よし、那珂湊に行こう」

「勝田交易所から那珂湊交易所まで馬車が出てるわよね? 馬車で向かった方が体力も温存できるし、良いんじゃないかしら」

ファルネウスの提案で、エルダーたちは勝田交易所へ向かうことにした。

勝田交易所は相変わらず人でにぎわっている。

馬車はまだ来ておらず、待合場所で待つことにした。既に三人並んでいる。

先客には別段気に留めなくて並び始めようとしたが、エルダーは、その中に見知った顔を見つけた。

「君は、神官の……」

フィニアはエルダーを認めると「あ」と声を漏らした。

「この前手当てを受けた方ですよね?」

「ああ。この前はありがとう」

フィニアは嬉しそうに微笑んだ。

「皆さんお元気そうで良かったです」

ファルネウスもフィニアに気づくと、彼女に声をかけた。

「ザサ教の神官様じゃない。こんな所でどうしたの?」

「実は、海浜公園にある教会に、届け物をしに行くところなのです」

エルダーは眉をひそめた。

「一人で?」

「あ、はい。一応、私も光魔法は使えますから……。今の時期は、海浜公園行きの馬車も出てますし」

「心配だなあ」

純粹な気持ちで漏れ出た。

「その届け物って急ぎ?」

「いえ、急ぎではないですが」

「俺たちさ、那珂湊に行くんだ。海浜公園行くの、それから大丈夫だったら、俺たちと一緒に来ないか?」

「えっ」

フィニアはおおぞおと、エルダー以外のメンバーに視線を向けた。

「良いんですか？」

「良いよな？ パーティーに回復役いなかったし」

「いや、まあ、俺は神官さんが良いなら反対はしないけど。一旦那珂湊へ行って、それから海浜公園へ向かうの大変じゃないのか？ それに、那珂湊の次に海浜公園へ向かう余裕があるのかどうか……」

「……確かに那珂湊と海浜公園じゃ方向も違いますもんね。でも……」

フィニアの瞳に、強い意志が宿った。

「私、困っている人たちの助けになりたいんです。貴方たちのような、魔物討伐に来た人たちと戦えるなら、この街を守るなら、私は貴方たちについていきたいです」

「神官さんの意志がそれなら、俺たちに異論は無いよ」

フィニアが仲間に加わった。

那珂湊にある交易所は、勝田のものより、さらに小さかった。

規模が小さいせいか、行商人らしき人も数人ほどしかいない。

別段買わなくてはいけないものも無いため、エルダーたちは早々に交易所を後にしようとした、その時。

「すいません」

交易所にいた何者かに、声をかけられた。

声をかけてきたのは、長い髪を無造作に一つ縛りにした男性だった。男なのに長く伸ばされた髪に視線が行ってしまうが、その視線は、すぐに、彼の顔に引きつけられるだろう。

魅入ってしまうような切れ長の瞳に、形の良い眉。オーヴァルのように端正な顔だが、彼とは違う魅力を持っている。「美しい」と形容するのが、一番しっくりくるような顔だ。

「俺も仲間に入れてくれませんか？」

エルダーたちは顔を見合わせた。

美しい若者は、続けて口を開いた。

「俺は、トーレンスⅡオルトリンデ。茨学生です」

王立茨城学院。茨城が誇る王立学院の一つだ。

「私の後輩か」

「私の後輩でもあるのね」

オーヴァルは目を丸くして、若い役人を見た。

「君も茨学出身だったのか」

「そうなんですよ。——トーレンスは何学部？ 私は社会科学部」

「俺も同じ学部です。法学コースに所属しています」

「コースまで私と一緒にだわ」

「そもそも、トーレンスは、学生なのに何故魔物討伐に

参加しようと思ったんだ？」

「そうですね……」

アルレシヤが役人だと知らないからか、トーレンスは正直に答えた。

「俺、役人志望なんですけど、魔物討伐に参加した経験があれば、試験の時有利かなって」

「学生らしい理由だな」

アルレシヤの言葉に棘は無かった。

「それに、俺、偶然友達と那珂湊に来てたんですよ。で、おさかな市場目指している時に、魔物が現れ始めたんです。最初、武器も持っていないから、逃げまくってたんですけど、そのうち役所から、魔物討伐有志募集と、避難通知が出されて。友達は避難して、俺は戦うことを選んだんです」

「お友達は大丈夫なのでしょうか」

心配そうなフィニアを安心させようと、アルレシヤは落ち着いた声で言った。

「各避難所は、役所の者と王宮騎士団が警護に当たっているから、大丈夫だろう」

ひたちなかには、王宮騎士団の駐屯地があり、すぐに避難所への対応ができたのは不幸中の幸いだろう。

「お二人とも、役所の人ですよ？ 皆さんの仲間になれば役所に行く手間も省ける」

なるほど。

エルダーたちは顔を見合わせた。

「どうする？ 仲間に入れる？」

「トーレンス、担任は誰先生？」

トーレンスは不思議そうに、ユリアンの問いに答えた。「民法のオルレア先生ですが、何故、今そんなこと聞くんです？」

「——トーレンスは本当に茨学生だわ。仲間に入れても大丈夫じゃないですか？」

ユリアンの言葉を聞き、トーレンスの顔が強張った。

「俺疑われてるんですか？」

アルレシヤは静かな声で言った。

「不快に思ったのなら、謝ろう。何せ、君は自分から仲間になりたいと言ってきたものだから、用心してしまっただ」

「今は疑い晴れましたか？」

「私は疑ってないけど」

「ユリアンがそう言うなら、問題は無いんじゃないか」
最年長のアルレシヤの言葉で、トーレンスの仲間入りが決まった。

オーヴァルは、トーレンスが持っている武器に視線を向けた。

「そういえば、君は槍を使うんだな。」

「俺部活で槍投げしてるんで。扱い方とか違うけど、イケるかなって」

それを聞き、ユリアンは何やら悩み始めた。

「部活関連の武器を選ぶなら、私も、レイピアで良いのかな」

アルレシヤが不思議そうに尋ねる。

「レイピア？」

「はい。私、学生の頃フェンシング部だったんです。役所で支給された護身用の短剣じゃなくて、レイピアの方が扱いやすいかも……」

幸い交易所に武器を扱う行商人がおり、ユリアンはレイピアを手に入れた。

丁度昼時だったため、おさかな市場で昼餉を食べるところになった。

おさかな市場は交易所から歩いてすぐの所にある。

漁港に着くと、海を見ながらトーレンスは目を輝かせた。

「やっぱり海は良いですね！ いつまでも見ていられます。ファルネウスは首をかしげた。

「海なんか見て、何が楽しいの？」

「俺、地元栃木なんですよ。栃木には海が無いから、海を見ると興奮するんです」

エルダーは、ファルネウスの気持ちに痛いほど分かった。エルダーの地元にも、海は無い。

「だから那珂湊に遊びに来てたのね」

「それもありますけど、やっぱり海鮮丼ですよ！ 茨城

にいる間に上手い海鮮丼食べたいじゃないですか」

「ちなみにさ、お勧めの店ってあるの？」

エルダーの問いに、アルレシヤは自信満々に答えた。

「那珂湊の魚は、どこの店でも上手いに決まってるだろう」

アルレシヤの言葉を信じ、一行は目に入ったお店に入った。

「うんめええ!!」

エルダーは夢中で米をかき込んだ。

「やべえ、良いトロってこんなに美味しいんだな！ ウニも何これ、こんなに美味しいものなの!!」

ファルネウスも頬に手を添えながら、満面の笑みを浮かべている。

「やっぱり那珂湊の魚は最高だわ」

「さすがひたちなかと言うべきか、水戸では、これほど新鮮な刺身は食べられないな」

海老は生なのに、生臭くなく、弾力がある。ウニも、今まで食べたことのない、クセになる味で、口に入れると

すぐに溶けてしまう。エルダーは、卵焼きはしょっぱい派だったが、この海鮮丼の卵焼きは、甘くても美味しい。

「寿司も食おう！」

「私も」

「俺も」

エルダーと長髪男二名が財布を手し、立ち上がった時、

店の外が騒がしくなった。

「大変だーっ！」

「大（だい）ちゃんが暴れてる！！」

トーレンスは首をかしげた。

「大ちゃん？」

「ええっ?! 大ちゃんが?!」

「ユリアン、大ちゃんって何？」

ユリアンはエルダーの問いに答える。

「大ちゃんっていうのは、隣の阿字ヶ浦って街の海岸に棲んでいるクジラなの。普段大人しいのに……」

「魔物の出没と関連しているかもしれない。とりあえず、ここは俺がまとめて払う。早く行こう」

アルレシヤの言葉に甘え、エルダーたちは慌ただしく店を後にした。

阿字ヶ浦は、那珂湊に隣接する地で、すぐにたどり着いた。

海岸沿いを走ってきたため、大ちゃんはすぐに見つかった。

大きな波しぶきをあげながら、身体を深紅に染めた巨クジラが暴れている。

「大ちゃん何であんな色に……!!」
アルレシヤが目丸くしている。

「普段はどんな色してるんだ？」

エルダーの問いには、ユリアンが答えた。

「普通のクジラと同じ色よ」

エルダーたち以外にも、討伐部隊らしき者が見える。

他のパーティーは、皆一様に武器を構えて大ちゃんを攻撃しようとしている。

アルレシヤは他のパーティーに向かって、声を張った。

「止める！ むやみやたらに大ちゃんを傷つけるな!!」
冒険者の一人が異を唱えた。

「でも、早く落ち着かせないと、街に被害が及ぶぞ！」
「それでも——大ちゃんは、ひたちなかのシンボルだ。」

やみくもに傷つけないで欲しい」
そう言った矢先、大ちゃんはうなり声をあげると、尾ひれを大きく揺らし、停泊してあった船を破壊した。

周囲から悲鳴があがる。

「このままじゃ、さらに船や街に被害が出る！」

「攻撃する以外の方法は……」

ユリアンの声に哀しみが滲み出ている。

地元民じゃないトーレンスにもユリアンの気持ちが伝わってきた。

別の方法は無いのか。

目を凝らして大ちゃんを観察すると、大ちゃんの額に紫色に光る宝石らしきものが見えた。

「あの紫色の石は何だ!!」

「どれ!!」

「額に付いてる!! 見えるか!!」

同じ大学出身の先輩に、敬語を使うのを忘れるほど興奮しながらトールレンスは大ちゃんの額を指さした。

アルレシヤも気づいたらしく、目を見張った。

「あんな石見たことがない! 普段の大ちゃんには付いてないぞ!」

ファルネウスは矢を構えると、渾身の力で弓を引き絞った。

ファルネウスが放った矢は、大ちゃんの石に命中したが、石の硬さに弾かれ、海へと落ちていった。

「チッ。私の力が足りないわ」

「俺に任せろ」

そう言うときアルレシヤは目を閉じながら深呼吸し、意識を集中させた。

そして、目をカッと開くと、威勢のいい声をあげながら、踊り始めた。

彼の踊りには、力強さがあった。キレのある動きからは、雄々しさと勇ましさが伝わってくる。隆起した筋肉は、一種の美しさがる。

「嘘だろ……!!」

オッサンの踊りで力が湧いてくるわけないだろ、って思っていたのに。

身体の底から、力がみなぎってくる。

その場にいた全員の力が、一時的に二倍になった。

「すげえーっ!!」

「いけ、ファルネウス!」

アルレシヤに言われるより早く、ファルネウスは再度弓を引き絞り、矢を放った。

ファルネウスが放った矢は、きれいな軌道を描き、大ちゃんの額の石に突き刺さった。

大ちゃんは咆哮をあげながら、身をよじっている。

「お願い、落ち着いて……」

フィニアは手を握りしめながら呟いた。

大ちゃんの額に付いていた石は、鋭い光を放ったかと思うと、消滅した。

その直後、大ちゃんの身体の色が、段々と黒くなっていき、一般的なクジラのような姿に戻った。

「やったか……?」

まだ安心できない。オーヴァルは警戒しながら大ちゃんの様子を見守った。

大ちゃんは動いてはいるが、先ほどまでの激しさは無い。

大ちゃんはゆったりと泳ぎ始めた。――元に戻ったのだ。

周囲から歓声が上がる。

「やったぜ!」

トーレンスはガッツポーズをした。

「よくやったファルネウス!!」

「アンタの踊りのおかげよ」

周囲が歓喜の雰囲気に含まれる中、オーヴァルは考え込んでいた様子だった。

「どうしたんだ、オーヴァル。考え事？」

「——ああ。今回の大ちゃんを見て思ったのだが」

オーヴァルはひどく神秘的な面持ちだ。

「魔物が人里に現れ始めたのは、何者かが仕組んだ可能性があるんじゃないか？」

オーヴァルの推測に、ユリアンの背筋に悪寒が走った。

「何でそう思うんですか？」

「大ちゃんについていた石——魔物が、生き物を意のままに操ろうと考えるだろうか？」

「高度な知能を持つ魔物がいないとは言いつれないぞ」

オーヴァルはアルレシヤの言葉に頷いた。

「確かにそうだね。でも、何者かが魔物をひたちなかへ送りこんでいる可能性も視野に入れた方が良いのではないかな。闇雲に魔物を倒し続けるよりも」

オーヴァルの予想が当たっていれば、この旅の姿は、大きく変わることになる。

「対魔物の旅が、最終的に対人になる可能性があるのですね」

フィニアの表情が固い。

「そして、魔物を意のままに操れる者がいるとすれば、それは、ひたちなか、茨城だけの脅威じゃない。——この国の脅威となりうる」

七人の旅人の間に、緊張が走る。

自分たちは予期せぬ形で、大そうなことに足を踏み入れてしまったのかもしれない。

第一部 終幕